

2. 研究成果

(1) 計画研究

計画 1-2

野生ニホンザルオスにおける採食行

動の年齢差

半谷吾郎 (京都大・理・動物)

屋久島の野生ニホンザルオスを対象にして、採食行動の年齢差を調査した。調査期間は1997年11月から1998年10月までの約8ヶ月間、調査時間はのべ約1054時間である。屋久島H群のオトナ、ワカモノ、コドモのオス合計8頭を一月に各二回、終日連続個体追跡法によって調査した。

オトナとコドモの一日あたりの摂取乾燥重量を比較すると、非交尾期はオトナの方が多く、交尾期にはコドモの方が多かった。コドモの一日あたりの総採食重量の平均値は、オトナを1としたとき、非交尾期にあたる月では0.7-0.9の範囲内で、交尾期にあたる月では1.2-1.4の間であった。ワカモノとオトナの間には一定の傾向がなかった。また、食性の構成を比較すると、①コドモは動物質の採食が多い、②コドモは繊維質を大量に食べることがない、③コドモは堅いハゼノキの種子の採食量が少ない、④コドモは頬袋散布型のシロダモの果実の採食が少ない、などの傾向があった。

オトナを1としたとき、コドモの基礎代謝量は約0.6となり、一方オトナとワカモノの間にはほとんど差がない。本研究では摂取乾燥重量の比較にとどまっているが、少なくとも交尾期ではコドモはオトナオスと比較した場合、その熱量要求量に容易に達することができると考えられる。また、食性の構成の分析から、消化能力の低さ、咀嚼力の弱さ、頬袋の体積が小さいこと、などの採食の制限要因としてはたらいっていることが示唆された。

計画 1-3

野生ヤクシマザルにおける繁殖戦略と採

食戦略の相互関連

松原 幹 (京都大・霊長研)

オスの繁殖行動と採食行動はトレード・オフの関係にあることが多くの動植物種から報告されている。霊長類においても近年、繁殖行動によるエネルギーの浪費や食物摂取への影響が取り上げられつつある。本研究では、オスの交尾戦略の違いによる採食行動の変化を検討する為に、ヤクシマザルを対象に調査を行った。

調査期間は1998年9月から12月までの3ヶ月間で、鹿児島県屋久島西部林道地域に生息する野生ヤクシマザル(H群)のオス5頭を対象に、1日8時間以上の個体追跡で観察を行った。記録の取り方は、観察対象個体の行動は連続観察法で、及び観察個体周辺の他個体の行動と位置関係をスキャンサンプリング法で行った。本調査では交尾期におけるオスの繁殖努力の指標としての交尾行動や発情メスへの求愛行動、他のオスからのガード(敵対的交渉・発情メスへの追従)が観察された。今後、これらの資料を分析し、交尾努力の定量化を試みる。また、交尾努力による採食行動の変化について検討を行う予定である。